

俳諧

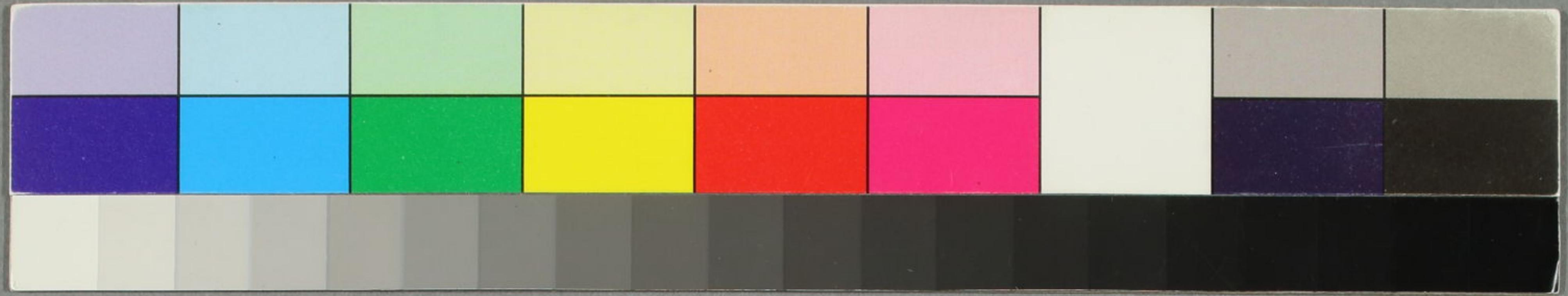
季寄持扇

下

季寄持扇
下

5
4333
2





4333
2

射祭獸 李由が句は射の祭

熊栗架 栗の指は熊の

賣入大木為蛤 化して潜物と

崩魚 我果はらと売む者も

梁 ○網代打 細代は冬を志す

番綿 より打そそく字信の網

赤 ○番船は枳州大坂より江戸へ積出を

胡藜 九月野外に群とる

秋の限 秋の善は秋の夕

秋の名残 秋の目も是

秋の惜む 秋の善は秋の夕



秋の湊 何れも昔秋の詞こそ外に
秋深き冬と積り老と

〇九月盡 隣秋と属
るかゝる

〇立冬 冬ハ終之物終よなる之冬ハハハ
之ハ由ハ冬之日本秋名よやり

應鐘 開志鐘より六水の成長
するこ應ハ陽は應も其鐘ハ

〇小雪 圃霰後
物動くつふむるす

十月 良月。陽月。孟冬。上冬。
開冬。亥冬。泰正。小春。

初冬。暢月。三冬。九冬。時雨月。
〇初霜月。神無月。小十月。かま

ざり月。神
さるり月。

更衣 朔日を日侍衣かへあり掃
寮妻の所装束と撤して

冬の句 冬のは改めぬ只衣更とむ
りよてハ冬ハ四月より心づい

〇孟
冬 天皇南菊よ出所ありて節
舎行たり也と孟を氏

氷魚と賜 文右の若令
ニ秋の後よ

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

〇神送り 朔日。神の孫。
賜ふ 神の留さこの

さるの日亥の初餅と食へ八病を
一老八開化十年十月但馬国より初
て餅を炊むとせぬの
○達磨忌
この餅の始りとしり

五日達平八南天竺の人初り深
入る武帝契らむ江と漲て魏入
り嵩山に居る九年を経て西域に
飯る深の大及二年十月五日入寂代
宗謚十七
○射場始 天子射場
覚大師と云ふ 射場始 天子射場
ありて云々以下の射場を正徳の初
り先代旧支本紀或公事根條に二百と
載る

残菊の宴 五日延喜の正代より初
る群臣皆とつくりは
る御所にて
○興福寺法花會
重陽の月
一名山階まゝの九月晦日より十月
六日まで妙法の大會とひらけむ
此大會ハ開隆冬嗣公初める空六日ハ
冬嗣公の父長恩大臣の清忌日よあま
るゆゑなる

○十夜 この月本日より十五日までの
る御所にて
○絳麻手會
る御所にて
り十月十六日と南都興福寺にて
こまに修む大職冠の忌日なりて

○金毘羅祭 十日讃州務志郡
ありてなる林一座に
竊大明神或ハ素鳥鳥山山の形素
の形に似たりかよまが山と号す

○芭蕉忌 十一日芭蕉庵杭多ハ伊
賀の人と云ふ倍姓松尾氏
初の名ハオセ後ハ忠左エ門宗茂と
改む後江戸に居りて御借名名あ
り元禄七年十月十二日御疾を患て
歿波の祿亭に没す其角去春大州
管室殿と云りて大津

○御景供 十三日又所命攝政公金式
と稱す日蓮上人の忌日
○下元 十五日
十五正月上元七月中元十
月下元と云ふ天孫の月と云ふ

○水官 十五日水官人の善悪を
まじりて以て天帝に奏せ
厄と解せ 十五日水官人の善悪を
まじりて以て天帝に奏せ

○聖一忌 十七日洛の東福寺の
開山忌ありて日方丈
に付物なかり午後聖一の徳を腰
に掛りて修むの須弥壇に委垂

辨當納 茶王國一茶師の人作とあり
日の余日と年中並山の終

りくまる ○御取越 一百宗門此
な名づく 徒この月祝

雪上人忌と終ま忌日ハ
十一月よりあまきい

○夷講の
月廿日或ハ家例に依て日定ら五商
要の徒西宮大社宮とあるこの社商

哭とよみ 誓言文拂 大日世ハ夷講
ふあるり 高志山海

の孫味とより酒宴を設く年中出
てふの花主或ハ世士の人を招きて

餐食を是と誓文拂といふ是ハ高
人考く敷さまの跪と拵ふゆえを

る後茶師小官者多し号して茶極
四條通りよみ乃とある社あり

是と誓文文の社とよみ又
大坂より七宗の戎の社とある

○法勝
寺大衆會 北四日より九日と志
仁のころもハ後より

本寺茶師ハハ茶
後下西教とあり ○大社の神事

十一日より十七日と大社村茶大神
宮ハ出雲國神門郡村築村とあり

りある社大已貴号孝安天皇三十
二年無跡毎年神祭七十二度中

十月ハ猶よは秘の祭りとく凡十月
十一日より十七日とを禰と稱する同

風烈しくは嵐三日一蛇化して壁
食て海上に浮む是とよりて曲物小

藝り社あり納むとよりて蛇蟻
蛇と似て錢散の班文あり尾先垂

尾と似て岐さく屈曲して宇賀社
のこじ尾社を才とくももの

○
柵尾虫供養 柵尾寺ハ明恵上
人の開主として世

茶ハ九
八日と ○口切 三月二茶を括五六
八日と 月以壺に括てある

こ山一上、九月に流氷ハ出ると十月
ハハ茶人主壺の口をひりくゆえこ口

初霜 早霜。靄。初霜
消る。雪の禱。雪

の茶。雪の 霜山朋色 霜相折
し。雪の初

企 霜はひこめ 霜をとりて秘蔵抄
上 霜をとりてあまき

霜をとりてあまき
霜をとりてあまき

雨 又粟雨とも云。初時雨也。村志

くま 雨のふりこもちまをいふ。涙の志

くま 雨のふりこもちまをいふ。涙の志

時雨 松風の時雨 川音 松風の

夜時雨 片時雨 一方ハそれ一方

横時雨 風はあつてよと 志田

時雨 風の 木枯 眩。風とつみ

液雨 唐風 中倍

初雪 初

初雪の見赤 若ハ初雪よれハ

初氷 初氷解

冬牡丹 八月より

名草枯 十月より

冬椿 早咲椿。椿

大葉の花

寒菊 小葉ハ

八手の花

茶の花

山茶花

寒梅

歸り

水

花

仙花 千葉あり 單葉あり
○枇
千の栢葉の冬の花

杷の花 白き葉にて八月より咲
け十月に盛る 篠月と

○樞の花 木を畑にて牧
をさす

○散紅葉 ○名の草枯
むす

○臆 風木上を
字結て秋

○鶯の子鳴 冬日音
中を鳴く

○落葉 あり
あり

○枯尾花 ○枯
風よむ

○柵の花 和名
さくら

○木れ葉 奇之葉
あり

○木 葉舟
あり

○枯柳 ○冬木の櫻
り

○雪の下 葉
を

○大根 大根引
あり

○雪消食 独六生
あり

○雪吹 五出雪花
あり

○無三冬物 雪六花
あり

○心ら舌 惟子の男
あり

○心ら舌 惟子の男
あり

○心ら舌 惟子の男
あり

○心ら舌 惟子の男
あり

○心ら舌 惟子の男
あり

○心ら舌 惟子の男
あり

雨と雪の交 **雪吹倒** 是七
るなりと入り 是七

雪作 雪の作ら
揚山の井は出たり くもまる

雪竿 お城
の人 多く水地はありとそ

雪 雪の
竹竿と法條小立て雪の

雪 雪の
源やと知る雪竿とついで

雪 雪の
さき柄を墮 いよものこれるり

雪 雪の
仏。雪の布袋。雪をす。雪は籠

雪 雪の
。雪獅子。雪中小児の戯。是を

雪 雪の
かま **雪礫**。雪打塔き中の

雪 雪の
の山 雪の **雪車** 是ハ水城の人

雪 雪の
雑り **雪履** **雪女**
捨るの具。木と以てんを **網貫**

雪 雪の
作るその形。輪まき車の区 水地の人。雪中

雪 雪の
用る如の字。鞋 **雪履** **雪女**
山中杖き敷て **雪蛆** 雪性

雪 雪の
とすもものより **雪** 雪の
と以て **雪の肌** 美人よ

雪 雪の
ふ **富** 雪の
り **富** 雪の

雪 雪の
士 **の雪** 雪の
かり **雪** 雪の

雪 雪の
霜 **氷** **氷の轄** **氷柱**
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

氷 氷の
是ハ水柱 氷柱

○牙るあは○餅もちひえ

くあの畧りらひら ○破あや赤切あかの ○炭すす電でん

炭すす燒や石いし灰はい ○小この炭すす ○池田炭いけだすす ○さ

○廻炭まわすす ○炭すす頭かぶ ○一俵いっばうの内うちの大だい

半はん ○輪炭りんすす ○細炭ほすす ○白炭しろすす

獸炭けものすす ○晋しんの羊瑊やうぜん炭すすを用もちて獸けもの

那離獸なれいじゆ ○櫛くし ○火ひ燧たい ○火ひ燧たい

助炭すけすす ○埋火うゑひ ○火ひ鉢はち ○火ひ燧たい

櫓ろ ○埋火うゑひ ○火ひ鉢はち ○火ひ燧たい

蒲團ふとん ○衣い襦じゆ ○頭かぶ巾きん

足袋あしざい ○袋踏皮ふくろあし ○袋踏皮ふくろあし

温石ぬるいし ○湯波ゆな ○湯波ゆな

○綿帽子わたぼうし ○綿衣紙わたぎし

衣い ○月つき牙が ○鐘かね牙が ○大だい

根引蕪ねひきゐ ○胡蘿蔔ごろも ○莖くき

菁冬菜せいとうさい ○莖くき ○葱ねぎ

又また根ね係けいとと○葱ねぎ ○葱ねぎ

標めしるをを下した女によ ○切きり乾かん羅ら蔔ぼく ○

乾菜かんさい ○干菜釣かんさいつり ○枯く芦ろ ○木き

の葉のへ ○木き紫むらさ衣い ○枯く野の ○

朽野くの ○百濟野ひやくせい ○鷹たか鷄けい兄あに

鷄けい ○雀すずめ鷄けい ○雀すずめ鷄けい

隼はやぶさ鷄けい ○隼はやぶさ鷄けい

鷄けい ○角かく鷹たか ○鷄けい

鷄けい ○鷄けい

鷄けい ○鷄けい

鷄けい ○鷄けい

かこり香 鷹の 雁匠 ○追

鳥狩 列卒を以て稚子其の外を

鳥叫 鷹を呼ぶに又人の声

○翦鷹 ○偷立鳥

○伐草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

○刈草

冬

引きの花中、犬を指す大と引引かす獵者の祠より引と

○生海鼠イヌネズミ。旁海鼠ウツクシ。

鱈ダウ。鮠ウナギ。牡蛎カタツムリ。河豚カハクシ。

豚イノシシ。西施サイシ。

乳チロ。吳人ウイジン。豚の脂イノシシノアブラ。○鯨鯨クジラ。

勇魚取イサナ。伊沙那イサナ。伊沙那イサナ。伊沙那イサナ。

附て五イ。鉸突カサネ。鉸カサネ。鉸カサネ。

○鍋燒ナベヤキ。燒ヤキ。燒ヤキ。

燒ヤキ。○夙吹大根ソクフキダイコン。蕎麥ソバ。

湯ユ。○炭團タン。○鷄卵チキダン。

酒サケ。生薑酒シヤウキウ。○綿ワタ。○冬籠フユカゴ。

○短日ミヅカヒ。○冬之鹿フユノカ。

十月ジュウグツ。仲冬チュウトウ。八月ハチグツ。九月クウグツ。十月ジュウグツ。

黄鐘ワウシユウ。圍黃鐘ウイワウシユウ。○大

雪ユキ。圍小雪ウイコウセツ。○冬至トウジ。

○大雪オホユキ。

○小雪コウセツ。

○霜降スヤウカウ。

○神農カミノウ。

○神農カミノウ。

○神農カミノウ。

○神農カミノウ。

○神農カミノウ。

祭 冬至。唐山の人炎帝の号を
る祭をたてて祭と初めたり

医及の祖神を医所ありて
まは月田の神と祀まはる

の奏 朔日中務省より明年の唐
とて子へまはるる

唐のくもりまりハ欽明天皇十四年百
濟の博七ガ

○宮線と添 晋魏
まはるる

○履 官中紅線と以日氣と量る

襪と献 婦人冬至の日履と襪
と舅姑よまはるる

○赤豆粥 冬至。共
工氏の子

○あたらか 豆粥を食て
疫を攘ふ

○相嘗 十一月朔日赤小豆飯と
用ふ是とあたらか

祭 上郊延喜式より赤小豆嘗の
祭と十一世ありとより近頃の

○宗像祭 上郊荒ぶ公宗
像あり

杜本祭 上郊
杜本の祭

○當麻祭 上郊
當麻の祭

卒川祭 上郊
卒川の祭

○中山祭 上郊
中山の祭

○大原野祭 上郊
大原野の祭

○古田祭 上郊
古田の祭

○山科祭 上郊
山科の祭

○平野祭 上郊
平野の祭

○五節帳臺の試 上郊
御

前の試

全上。中の廿五節の試くいふ主上常事

よ於て所強くありぬ其の爲に五人にて主上御衣を御指し置て所香と召る主上の御指置を召る事この時より外は但所鞠の時ハ帳巻の
○殿上の淵醉
試は進て召る

中の室この日ハ所々公卿御衣をやくもどくひのひその後私者あり次才は皆をさきてわの陣とめぐり五節をいり又ふりて控来なくあり云この事正月二日三日もあり潤碑はふくは
○狩の儀仗
そ日五節
は日五節
は日五節

○童女出流
然とせざる儀之

中、如清凉面は孝女と臣て天子の御説むるは五節の老ま
○鎮靈祭
中、寅吉田
八神の祭

公、根元よこの祭ハ人の魂魄の
○新嘗祭
考物あり宇麻志麻治
の命より起まりしぞ

中、外その年の新嘗の初穂と神は身らをも之天子の代の初は初と
○豊明の
毎は初と新嘗と云

節會
中、辰前日神は儀は初
教とそ日天子にむる
下、小も初ふゆを
○日吉臨時
去はるるなり

祭
中、申建曆三年十月十八日より
くりて面上の儀とまらる

賀茂臨時祭
下、酉宇多天皇
寛平元年十月
○東三條の御神樂
よりは
仁平二年十月十七日丁未
東三條の御神樂
○里神

樂
内、裡の外は
○山神樂
内、佑正の神
○小忌衣
小忌の
床よりとぞ

衣、小忌青摺の衣、山笠の衣は
豊明は若す、装束よてワがきと

忌といふ心之 ○三嶋大明神祭 伊豆

祭ハ中ノ酉日之空林大山祇の余祭
礼の日法由より商人奉りて流の礼
とまふ是をさるる ○子祭 ○由
の子祭心あ辰子の月さるる此の
日は大夏と云ふ二服大根黒米を豆

祭 ○道陸神祭 十六日○大
佐天王子村
合法辻の辺は小サさるる此あり此
仏の教よ米の粉とゆり供物を代
へ給ふ蜜柑と馳して踊る是を道

陸林祭といふの祭の二三日あよ
里村中の寺出て往來の人よ供物
料をとふあふふんハ繩と泥とぬ
りて人とまゝとむ佐よ

○日陰の
どろくじり祭といふり
長髪 日かげの束の日陰のかつらハ一
名とさうり若くはみ林祭の時
この若をくりて舞へ神さるるの舞
且又袖もかきりけをも合も日かげ
の束とて舞ふり

○心葉 梅花三
寸計又
金の枝よ赤の是貝と作
るえい是を心葉といふ

○神遊
ひのす 式抄は太貴会の時近江
の板田郡より志能の系
りて松を春くその時取さるる事
の始はかくこそをせとてふてた
のこさつせといふ考とてふくこの
系市ん系よ出より又藤の系も也
とソウツリさあよふ考のま

○阿
かくとこさふくおんハゆるな
知女 是も林木の明托の名
さる一説多し畧之

庭
寮 林木の時焼火さるる火慶焼と
ハ亦この庭燎と春ること非代
考よ

○採物の系 是ハ林木を
考人考ふ
まゝとる拍と考よ依りてふくこ掛
舞。杖の縁。方。短。片折。抄。

○韓神謡 宮内省よ述
はす韓神二
考よ

○大前張小前張
是亦僅る系よ考
は神楽の考よ

○神樂歌
冬 九十八

歳○早葺○吉○利○星○得○終○る○
木○務○備○。晝○目○。立○。朝○氣○。其○務○
○竈○の○香○。○
右○八○林○末○の○時○の○物○ ○山神祭

不○山○林○よ○あ○る○。○
切○け○焚○き○。○
○御火焼 ○屋棟の遠風反凡
此○の○月○法○社○に○

○吹革祭 八日祭
後○非○之○或○人○云○三十九世は天和
志○務○者○を○か○ふ○。○
○十月八日新法精治公の位
者○て○吹○革○を○扱○ふ○。○
林○と○祭○ ○新玉津島の火

燒 ○十三日後成々の勅法と五象
南鳥丸の西より昨今迄象
家○多○く○系○統○或○ハ○法○未○の○お○寄○あ
り○の○門○方○一○町○甚○く○比○社○の○氏○子
之○を○日○不○人○神○湯○と○云○
家○に○決○す○時○ハ○法○言○と○効○
○曆賣

髪置 田俗は男女も七三歳より
是ハ十月十五日又六吉日と
辨ひ髪を垂れとして。白髪條。松。
橋の作り茶の未養子。と。重の
小とゆの。ハ。結。フ。リ。産。神。の。系。統。を。
り。之。の。日。此。食。祭。ハ。か。る。以。て。小。重
并。よ。小。る。之。信。の。ふ。ち。よ。付。る。是。生。屋
海。よ。て。齒。の。夕。ら。ん。せ。う。よ。と。終。ふ
ころ ○空也忌 十三
とぞ ○曉の鈴

空也上人八天祿二年九月十
一日辰申年七十空也堂六
極楽まゝ。号。を。四。象。坊。の。西。脇。川
の。東。に。あり。鐘。如。法。堂。と。云。ふ。極
楽。ま。ハ。元。之。系。統。也。あり。松。等。を
植。と。極。と。ひ。り。空。也。上。人。の。山。に。住
し。時。毎。夜。麻。布。を。上。人。の。声。を。聞
し。て。閑。居。の。友。と。一。夜。來。ら。ん。と。云。ふ
是。と。怪。し。む。時。日。攝。者。來。り。て。云。服。お
こ。り。不。て。麻。を。殺。し。上。人。に。ハ。は。は。と
さ。や。と。云。ふ。其。の。皮。と。角。と。を。乞。て。は。と
束。に。角。と。杖。に。挿。し。挿。て。遺。風。の。お
と。と。孫。と。心。を。取。と。極。地。で。毎。ら
判。髪。と。信。と。ら。る。の。神。和。ハ。その

○袴着 十五
○帶解 四

冬 九十九

被初 未許うけいの西東玉の管解
よおは女児よはてはを

酒の市 酉ノ日伊豆国
ひまり 三崎の松あり

雞の町詣 酉ノ日鷄大明神の社
武州葛飾郡花又

報恩講 二
日より廿八日と祝書上人の忌日之東

大師講 二
信長を討つて御旗風と云

智恵粥 天台智者天
北四日也 師の忌日之比

御祭 北七日春日若宮の祭之本社
とまふこと一所より平林の

後日の能 廿八日五日と能あり祭
礼の後重なる後日の能と云

宇賀 春日祭
よりて毎春

日の使 春日祭
仍つてとぞ

掛鳥 廿八日五日と能あり祭
礼の後重なる後日の能と云

歌舞 晦日九条東河内院
あり宇賀と云

顔見連見 名ハ文獻通考よりへりその佐
者妓は作る十一月朔日東に大

百 百

以てをちむといふ新見と一
つらにせしむるに世の芝居
十月晦日の茶茶店の形に移る
の煙巻と出まをを教へせの餅
物といふ或は貝原の花より酒
樽菓子の子を山のこく積り
大なるれは進上某大の文をを
く是と積物といふをいふを
んとて法入籍集を見る
○寒念
いと更にいふべし

佛 凡そ三十日の間仏門の地母
經と唱じ仏名を唱て三昧野
と題し江戸ハ浦子親善又品川千住
の法場を巡行するをさ念仏

寒垢離 候務の地さ中法
云 井は橋上よまて水
とあり跡を包ふ之是を
垢離といふ是を中法水行

寒造 訣は中中製を
その時を造と称す
寒声 歌曲は松平山のさ中朝堂大工
声と我はまをさ声といひ或ハ

沢庵漬製 凡そ月
中旬

大根の沢庵漬と製せしは早春の
芥物とす八分を元平川東海古の
沢庵和尚作て是を製す
○茶食 加は沢庵漬の必ありといふ
中虚症の人鶏肉者
肉をと陸橋して食ふ
○新干燕

新干大根 ○太山樞 ○新
生姜 一名
寒苦鳥 一名
魚の

生薑 堀る
○寒苦鳥 一名
魚の

新干大根 ○太山樞 ○新
生姜 一名
寒苦鳥 一名
魚の

魚といふ川よ多し
ありきよ時出る魚といふり

杜父魚
ありきよ時出る魚といふり

十二月 十二月八日
○大呂 種大
呂を

小寒 種大
呂を

冬十二月 百一

後十五日平奈 **○大寒** 團小
速と不さとも 五日午せば速と大さとも凡小さ
今春の日と三まをさかるといふ
臘月。季冬。除月。潤年。
急景。殷正。窮月。嘉平月
。涂月。窮節。暮冬。杪冬。
二陽月。極月。春待月。第月
。梅初月。三冬月。乙月。や
よつむ月。くまこ月。おやこ月
。終月。
かきりの月。

志はま

この月をいさぎまを
とも志はまはまは年極

るの暇つこまを連声していふ
へハつてうちまうせをいり後世師
走はつくりや後之の況を **○乙兒**
をまものハ皆暗推ま

の朔日

物の始を甲といひ末を乙
といふをもて終りの月也

朔日

或ハ
乙兒とも **○乙兒の餅**
は作る俗間十二月朔日餅を食ふ
にあり人の才さる老この日とい

父兄を敬まぬハ才児の名あり
と江戸の俗にまを川浸餅と云
この日餅と云ハ **○忌火の御**
水部をいとしり

飯

朔日六月 **○大神祭** 上外
小ぢなり 四月小

同日

三輪大 **○天智天皇御**
明神の祭り

國忌

三日近江は崇福寺小て
りハる朱を二年より始

崇福寺ハ昔ハ志賀寺
ともさからのもともまよき **○臘**

日

道家は五臘あり正月朔日と
天臘は五月五日と地臘は

七月七日と道徳臘は十月朔日
と民歳臘は十二月朔日と王侯

臘 **○温糟の粥** **臘ハ粥**
を

釈者成道の日ハ本朝ハ五山ハ於
てこの歳あり又唐山ハ十二月廿
三日ハ秘まはれて後ハまを
或ハ七宝五味の粥を焼るをんを
臘ハ粥 **○御躰ハト奏**
より

よしあり神祇友中臣卜部
ホ卒明年六月とのことと巻
○月

次の祭日 ○神今食 十一日何
月におぼし十日の夜終幸ある時ハ

中和陰にて終る終幸なき時を
神祇友

○事始 八日六箇汗
て終る

○御佛名 十九日あり廿二
日追仁寿の

寺本をどうして内儀の中より
南の額の間又南北に机とて

塔形をかく仏あり香花と佛
ふ廂は地獄妻の御厨風と云

つけ緒 寺仏名の時々所置
○柏

梨の勸盃 氣の某持味は柏梨
の莊を以左近府よりその地利

を以官之以下酒隙の料は宛
も中仏名の

○年の終に魂祭
二回今ハこのまは十二月の晦日午

の時よ本として正月朔日外の時よか

星佛賣 二月十三日仏工末年比
属星の形と服て茶裡

は秋と民間小もみりをもたぬ
京師の街上星仏と賣るものあり

荷前の使 十三日流云より終る
湘の稻と十陵八墓へ

御髪上 下千巻へ
御髪の内

玉牛童子 掃屑ゆりて主を察
は向ふて殊なり

の像と立 大さの日を字は陰陽
師玉牛童子の像と門

口はまの青黄赤白黒の玉牛は春夏
秋冬の色よまをひて立るは七疫病

○著駄の政 五月は同
檢非違使

在京にて刑法を行ふは頭よあを
とひ是よあるを駄といふは刑具

内侍所の御神樂 天子内侍
は行幸内侍

あり刀自視詞をいふあり内侍
ふの前は主を寮帳を引て官を庭燎

○取勝寺灌頂

と二行よ設く

冬

十五日松尾の傍あり ○正月事

六務吉のこ今迄あり 始十三日 ○衣配いあひせ 女樂と試らまんとて先ツ衣と配らる

○浅草寺年の市 凡年の市ハ江戸

浅草を以テ下才とて十七日の初ハ十八日の初と云り徳川の郡行登程と

○大徳寺開山忌 廿二日山城ついで 野郡宗野あり大徳国師妙超の忌日建武二年十二月廿二日寂也

虚耗と照ちほ 廿四日床のそりより灯を照せば貧とて富

貴い ○灶の神と送おこ 廿四日今清の母ハ今日

灶神天よりウツ日として家灶神の礼は供物を区礼持 神を送ると云てその礼と焼まてると云又正月元おと神と送ふとて新は灶神の礼と供て物と

○鈴叩結願すずをたたき 廿八日徳樂志

の弁を小て踊念仏あり ○和布莉結願わふり 廿八日徳樂志

の神事 晦日長門本文字の園あり集人の社と称を祭る神五坐玉依姫彦火火出見豊玉姫不背合阿度日夜良の晦日の夜四更祝衣冠帯紐ひもとを簾と携へ炬と奉神前の石燈と下り法入り和布と持てぬる終夜泥河あり元旦は和布と神前かみは奠い既して

とと撤はらい固こ ○齋宮繪馬 晦日主は秋あり

伊勢国多氣郡齋宮村あり齋宮の樹下乃の傍は小祠あり毎日此祭後るとかくるあり

○五條 疫神とすむるあり

天神祭 節分の勝の儀かち白赤賣うり祭まつりの社やしろ大已貴おほおき少彦名すくなひなの祭まつり九月十日は行ゆき節分の夜京師の士民未済まじ白布おしろを買てとまを自家に焼く又小志の條と食ふこの條と食ふこの條社地差ぢまは代まの社の傍は勝軍かちぐんといふ或ハもちひとちんといふ

名なもとり ○吉田大榎せつかた 徳樂志

冬 百四

初家吉田の斎場の内陣よけて清
後と修と神人一人こまこま後ふ正月
十九日の
○厄塚建る 吉田神祇
若し同 節分の終

官よけて行々その式をよる塚を
築くことと厄塚くよ正月十九日
○追儺 儺、以疫を驅あり
去る 古人最るまきと重ん

き一名おまらひいし餅ハ臘日の
は公事根元よりえり、茲きせ
今ハ節分の夜とを、掃きよるも
ろじふ七金吾除夜進儺、あんハ

各分ハ後
○鬼ハ外福ハ内の
俗咒浴て来ること久し、卧雲日件録
云文安四年十二月廿二日明日立春故
及昏景毎室散敷豆因唱鬼ハ

外福内四字云この以よりの致う
○終賣 終、挿
挿 ○まぶ此終挿
の終挿、まぶの致さまこと土佐日記
ふもろえり今ハ櫛の致と用ふ

○燉豆 燉、豆
○浅草 浅、草
観音追儺 除夜より七日に金
龜山浅草寺あり

今夜未詣堂中より元乃チ初更の以鬼
形の者一人堂外より又一人方相氏
の假面を被りたるもの毛と退て堂
と巡る後除疫の札三千枚を撒いて

諸人ハ腹ふまはのく各あちを以拾
ふて持入りて自家の門戸に貼る
○節分 ○年内立春 ○除

夜 十二月晦日これを除夜と云ふ
言ころハ此夜舊年と除きなり
○米洗 米、洗
一説ハ元日ハ心まほまふ
大歳 元日
歳とつよと對して

○晚歳 晚、歳
○餽歳 餽、歳
○別歳 行歳 除歳 歳暮 いゆる
年 年の終 年改流る 年の果

○守歳 春急ぐ 年尾
○春と隣 春、隣
との除 年の隣 春近き

隣ハ近トシ 分歳支那の俗除夜
り長知あつたり飲祝願して
散むぬふ分歳といふなり ○大晦

日小ほこもり
十二月小の月を
ソム北九日あり ○

私大 奥州南部の人十二月小の月を
是ハ翌朔日と以て晦日とす

厄穢 厄落此月
大といふなり ○厄穢 へるより貧者

毎數十人解とす神鬼ニ装ひ男婦
鐺鼓を以門を巡り銭をとる是と打

夜朗と名づく ○年忘 唐山より
厄穢ハ逐疫也 淫散

七本朝三月月外旬良御親戚朋友
と清して酒酬とすまことあり

と年忘といふ是年 ○胸搞 節季
中の勞を忘る

むうハ乞児年の昔よ人家の門よ
さらし膚とあらりはと以拍と教

節季さむらひやくとて飾とす
こまを自月とすこまを節季はと

よもの ○節季 二十二日より
北七八日まで ○婆

等 北日より 伊勢大井宮人
五日を ○年籠 糸籠一丸日并

○孟宗竹 この竹を孟宗竹と
名する

八自鱧取 江海取ふと名あり伝
刑飯筋の鱧ふとるものを

名産とす上飯橋下飯橋一里をうり
の芳冬月ふかり湖面少開く

二三尺ふなるものを ○兼和田の鯉
いりて鱧とす

取 常陸國美和の鯉常國の名
有るなり

塩引鮓乾鮓 ○塩鯉 ○
口塩鯉

○年 市 松竹賣。経連餅賣。破子
子夜 賣。相搦栗賣。手鞠

賣 ○煤掃 和漢戸十二月旬
屋塵を掃く漢子

をを除けといひ我供ををを
と又祭るといひ我供ををを

○扎納め 杉櫛のれを嫁 ○餅

橋の東二町をかり四日市あり三河
万歳江戸ありて服古の衣を物
を穿ふ
○年の夜の大神樂
大
日の夜より正月五日まで江戸の町に
大神樂の獅子舞ありて其の趣を
を舞ふ

○神祇之詞

大嘗會
新嘗會
○宮居

古宮。小宮。社。荒社。古社
竹の宮。雲津の

改。素社。玉中。鳥居。素の
鳥居。石の

玉垣。瑞籬
とりあり。丸木の素座

玉垣。若み。玉垣。若の玉垣

片を記。子木の駒犬

拜殿。清供殿。称宜。御板

長官。伊勢山田守治の高木

御注連。夜かぐ

神樂。里林

神輿。御幣

神取。榊のちり

忌竹。御幣

神慮。詫宜。夢想。御湯

立。拍掌。座拍。忍拍

御闌。御贖物。木綿

便の水。御火

燒ヒキ○齋イハヒ持テ物忌モノイヒ誓言文チカゴトノミカクシ

胙ハク起請キスミ○氏神ウヂノカミ打火ヒキ切キ

火鎮守ヒノシヅメ○三寸ミツサツ洗米シヤメ○

繪馬エウマ○矢鏑馬ヤシバ○放生會ハシヤウ

岩船イハフネ穗屋作ホエヤ神カミおろし

舟玉フナタマ金カネはらはら○常陸帶トコノエ○

東遊トウユウ乙女子ニツメ○伊勢講イセノコト○

初午ハツヌ○小忌衣オホシヨモイ○庚申待カミヤマト

月待ツキマツ日ヒまらまら

遷宮ウツリノミヤ 非神祇詞ヒノカミノコト

元方ゲンカタ○年徳トシノトク○男山オトノヤマ○

佐保姫サホヒメ○竜田姫リウテンヒメ橋姫ハシヒメ○

竜神リウジン龍宮リウノミヤ○放生川ハシヤガハ○

勢セ○山伏ヤマブシ○柵サシ

上巳ウヘノミのノ萩ハギ

尺教シツケウのノ詞コト佛像ブツゾウ ○本像○座像○之像○

後像○元祖ゲンソ ○開山○門跡カドノシ

院家インケ○國師クニノシ○僧祿ソウロク○

禪師ゼンシ律師リツシ長老チヤウラウ上人ウパシ和ワ

尚シヤウ○西堂サイドウ東堂トウドウ○首座ウヅマ

藏主ゾウシュ典主テンシュ書記シキ行堂コウドウ僧ソウ

正テイ僧都ソウト法印ホウイン法眼ホウガン法ホウ

橋ハシ阿闍梨アセリ檢校ケンギョウ法師ホフシ

法躰ホフタム禪門ゼンモン入道ニツドウ叢心ソウシン

新發意坊官比丘尼

丘尼屋坊主坊房くしや
く宿坊

碩學僧老僧。
若僧。福

出家沙門僧。多住。美任。
小住。客住。薦任。

栗門叔氏沙弥寺律。

堂も。桑も。古も。荒も。穉も。山
も。里も。得も。ち肉。念伝も。
三井も。法尼も。初敷も。
鄒波も。塔中。はも。もふ。
。後堂。古堂。越堂。茶堂。岑堂
。尺加堂。羅洋堂。護堂。陀堂。

伽藍塔。ふ重塔。三重塔。
華塔。尾上塔。え

輪藏の塔。洞塔。
重石塔。九輪

大客殿厨眠藏居

士行人山伏輪宝頭

陀袈裟珠數念珠

帽子花血輪。百八。
乙ひの玉

拂子印むまぶ能化

修行導師喝食不
化

鉢叩着經五輪卵塔

素結十徳頭襟袴懸

金剛杖杖杖喚鐘寫鐘

鏡鉢鯨口木魚瑤瑤

經帷子鉢の米談義法論
論義

座禪灌頂布施法論
論義

施我鬼功德因果地

獄流轉三界十界

山浪（山） 陸奥あり西カ女のか

望夫石 昔貞女ありその夫役

日赴く弱子と推して餓して武昌

北の山上又送り立屋して化して

望夫橋望夫をあり 相思草 見

婦を夫と慕ひて道 領巾 麾

山 肥前松浦郡あり左 石

尤風 郎の婿とあり尤出てゆら

○手児名 かつらやまの

○夫婦 相ふらむま

○智入嫁娶婚禮 ち女

○媒 水人。月老又

御（御）の熱心 ○房 中の小門あり

洞房 洞房兩株谷散花 ○翠

帳紅閨 ○肉屏 房中あり

○後宮 禁闈中美人

人の名美人と画 是僕の元

王照君の胡地小嫁を 昭君の

故事あり 返魂

香 武帝の夫人李 香

待。黄熟香。十種香。麝香。香

○三夕香。吳越香。沉香。蘭麝

香。小香。香。位。吉。香。る。和。香。寄
南。香。伽。羅。赤。梅。檀。の。り。り。
宋。舟。美。香。及。初。香。大。泥。源。氏
香。香。机。香。盒。香。匙。掛。香。
白。代。袋。う。り。香。の。衣。守
番。考。南。

宮の識 あしりの血と女の肘の
ゆりかけ

の黛 眉掃 男色 美少
年。稚
密男 かみ 於曾の風流 かみ

士 あまのこ 紅絹 紅絹と云ふもの
はくす 妹拜 いとこ
花街 花街。乳の里。吉市。
室の津。神橋。江口。六段

女房 女房。男房。元宮人
の称。を。史。その。妻
妾 あま 外婦 あま 女 あま
宮傭 おん 姉 あね 郎女 らうにょ 吾姉子 わがあねこ
婢 めかけ 少女 せうにょ 桂女 けいにょ 專 せん 醜女 うみにょ 賦婦 ふにょ

遊女 あそびにょ 傾城 かたがけ
宿 しゆく 傀儡女 くわいにょ 妓女 きにょ 雛妓 ひなにょ 宿 しゆく
阿曾比 あそび 出女 でにょ 夜渡 よわたり 辻君 つじきみ せ
な。め。一。夜。つ。ま。ふ。女。樂 にょがく
白拍子 あしうり 了 あき 鬢 あし 小三板 せうさんぱん 禿 かぶ

白拍子 あしうり 了 あき 鬢 あし 小三板 せうさんぱん 禿 かぶ
百十四

妓の幼穉 ○白眉神 妓院よなる
かゝるもの

○鶺鴒 俗まかりてとふ
妓橋の老女 ○陰

間 男色と
ひまぐち 飛子 旅陰
間 ○金剛

○野郎 伽やらふ 伽ふて舟ま
んじう大坂よ

て伽やらふ又 ○亡八 茶街小極ひ
仁美礼智

孝財忠信のハツと亡 ○暁傘 元禄
ふねよ七八とハエ

に元吉系の手街中後朝雨ふまを
傘と妻まよりと暁傘といふ其角

か「不」ときけ暁傘と ○神媒 ○
哭をとりとある是あり

形見 かたこの肩のうこの髪か
このぬのぬのの早か

○恪氣「三」ろ あつち
つめと心

肌ふる○共白髪○縁○ さえ
小○えん結び。浅 ○仇ら登

爪紅○父無子「子」をせろ

を○かいよえ「虫」の印「あ

びあひ「ふり」心男小く○

屍目つらひ「う」とやま「忘

らるる「古」さるる「才」さるる

近まさり 非恋詞後家 うと
ま

賤女市女下女「桂」女

無常の詞 こゝろ哀傷とさるる
こゝろの哀さるる

塩干山「あ」せ「鳥」辺野

の烟「舟岡」○茶毘場 火薬
場

茶毘の烟「無常」の烟「死

出の山。死かぬ孫「みつせ川

○見り川 ○死人 ○志る余 ○棺

○三途川 ○野辺の送り灰

よせ ○墓 ○むくつさ ○まゝ

中陰 四十九の餅 魂結び

○枕食 ○自殺

害 ○白骨 ○冥途 黄泉

幽霊 ○亡鬼 ○骸骨

ろ ○ぬまさ枕 ○ふるさ余

辞世

述懐之詞 并 懷舊 往昔

は ○むく人 ○むく海 ○いしへの
の多 ○多の泣 ○むくの友 ○志の
ふ昔 ○むくの妻 ○秋 ○は
の泣 ○まぶさ ○まのま

老の余 ○むくのま ○まの松 ○ま
かま ○まのま ○まの老翁 ○まの

老多 ○年寄 浪人 ○生死

白髪 命 ○後家 ○憂

世 ○多の世 ○親子 ○世

帯 ○姥 ○隠居 ○世

苔の袂 ○黒染 眉の霜

侘住 捨る身 ○零落 家

と賣 賣食 其の目

古家 摺切 不仕合

借金 借状 ○年忌 月

忌 遠忌

非述懐詞 釣公羽 賣炭

翁カウ○賤カウ○愚カウ尉カウ座頭カウ

贅カウ女カウ○病カウ○草カウのカウ菴カウ

柴カウのカウ戸カウ

人倫カウのカウ詞カウ雲カウの上カウ人カウ○

武士カウ侍兵カウ郎カウ

等カウ奏カウ者カウ使者カウ醫師カウ

佛カウ師カウ繪カウ師カウ鑄カウ物カウ師カウ

儒カウ者カウ僧カウ

農カウ人カウ商カウ

職カウ人カウ伶カウ人カウ藝カウ者カウ

番カウ太カウ獵カウ人カウ

舟カウ人カウ桂カウ女カウ至カウ身カウ我カウ獨カウ他カウ

関カウ守カウ田カウ守カウ法カウ巳カウ苗カウ代カウ守カウ

綱カウ代カウ守カウ○月カウのカウあカウはカウ

亭カウ主カウ兄カウ

姉カウ妹カウ海カウ士カウ民カウ狂カウ人カウ御カウ乳カウ

母カウ○衆カウ徒カウ推カウ夫カウ鷹カウ匠カウ贅カウ

女カウ盜カウ賊カウ○祿カウ

且カウ若カウ君カウ臣カウ下カウ恋カウのカウ君カウ

嫂カウ妻カウ長カウ者カウ伯カウ父カウ伯カウ母カウ

祖カウ父カウ祖カウ母カウ姑カウ舅カウ娘カウ姪カウ

孫カウ○児カウ尉カウ御カウ傳カウ母カウ御カウ師カウ

能カウ太カウ夫カウ任カウ丁カウ道カウ心カウ者カウ屠カウ

兎男女「友達」内儀「師匠」

喝食「同宿」博士「酒醉」

張

非人倫詞「東宮」皇女「門跡」

公家帝「親王」宮女院「本院」

院「仙洞」新院「太子」天君

人間「入道」山姫「仙人」長老

二門「一家」六親「奉行」雜

式「給仕」典藥「下戸」眷属

祖師「我君」橋姫「本道」

外科「老若」俗大勢「勢」

樹「人形」龍本海耳「啞」盲

目「代官」目代「目付」月

と友「花」と友「月」とあは

居所之詞「家」家居「住居」小ぶ「古家」門

戸「背戸」窓「部」格子「障

子」殿角の内「窓」角の「窓」角の「窓」角の

○不そ 樓上「宿」宿「宿」宿

○屋屋「屋」屋「屋」屋「屋」屋

城「天守」亭「玄關」屋形形

路地棟「軒」柵「床」庵

里「村」天井「廣間」見世

「部屋」廊下「臺所」座敷「壁」
居間「母屋」湯殿「納戸」屋
根「欄干」築地「垣隣」藏
椽「火燧」坪内「鴨居」圍
爐「簀の子」冊爐裏「礎」
簾「井筒」走「置」暖簾
外面「番所」
非居所詞「寺」室の戸「築山」
堂「皇居」内裡「塔」伽藍「方」
丈「宮社」眠藏「柱」庫裡
辺土「竈」火焼屋
夜分之詞「神樂」日待「明星」

七夕「夢」夢想の夢「鳥」稻
妻「宵」やま「あま」くま月よ
こま「三月」の入「明方」有
明錢「東雲」暗あやふく「霰走」挿
頭かの綿わた「住吉」の市いち「炬火」
灯あかり「挑燈」行燈「燭臺」燧
燭あかり「も」びび「漁火」花見
埋火「あまて」ままとろむま
「寢」かかとく「著」けて「床」
狐きつね「照射」蚊遺火「舞鶴」
別の鳥とり「鶯」嵐あざな「蚊」ををの
寝ね「苔庭」ああと結むすふ東雲

蝙蝠ふし 螢あき 鶉舟うすね ○あぶら火

短檠たんせう 送り火おくりび ○油續あぶらつぎ 油突

卧ふし ねね 轉寐くるみ 起あ 衾かまど 枕まくら

埵う 鐘かね 深更ふかよ ○紙燭しそく 手燭てそく

初鳥はつとり 鶉川うすがわ 規狩わきあし 網代床あみしろ

衛士の焼火ゑししのやきび 燎あぶ 竜灯りゆうとう ○星

と唱とな ○追難おひがた ○産女うぶめ 化物かぶつ

夜よ 護まも 辻君つじきみ

非ひ 夜よ 分ぶん 詞し 法灯ほふとう 鐘霞かねがき 泊とど 夏なつ

神樂かみがら 其の曉そのあけ 夜よ 焼やき

火ひ 芦火あしび 御火焼みびやき 常の燈とこりのあかり ○

夜と待月よとまちづき ○明あき とつる。明果れ

有明あき の入い 三さん 月つき 出で 出で け

ふの月ふのつき けふの鐘けふのかね 朝朗あさか 入相いりさう

座禅ざぜん の床とこ 泊狩とどあし ○一夜酒

泊舟とどふね ○夢ゆめ 幻まぼろし

山類やまがた の詞し

山やま 嶺ね 嶽たけ 岡おか 岨すそ 坂さか 谷や 尾お

上かみ 高根たかね 麓ふもと ○瀧島たきじま 棧せき 杣そう

水みづ 炭すす 竈かまど 山姫やまひめ 山姥やまばあ 浮島うきじま

小島こじま 小塩こしお 山梨やまなし の類るい 山鳥やまどり

の類るい ○山やま 又また ある。空坂の 関せき ○五山ごさん 葛城くさぎ ○

関せき 不破ふた の関せき ○五山ごさん 葛城くさぎ ○

さの岩橋いわはし ○
久米路くみち の比ひ

非山類詞ハクサン鷲シウの峰トウ雪山セツサン島シマ

國クニ淡路島タンロウシマ山科の宮ヤマカノミヤ○富

士川シカハ竜田川リウテンカハ○水曾路ミヅソヂ鈴

鹿路シカヂ小野コノ吉野ヨシノ○山岩橋ヤマイハシ

瀧津川タリツカハ初瀬ハツセ三島ミシマ岩屋イハヤ宇

治チの川島カハシマ○私人シヤジン炭焼タンヤク瓜水ウメヅ

新ニホ山賤ヤマシヅメ仙人シヤジン下野ゲノ猿イヌ越

路

水辺ミヅヘの詞海シカイ浦濱ウラヒ江湊エミツ

渚島ササヅシマ沖岸ウチノカシ堤ツツミ沼ヌマ汀ツツミ川

水淵ミヅウチ瀨洲セシウ滝泉タキイ井イ溝ミヅ

寄ヨシ淡潮タンシウ汐波シホ氷流ヒヤリウ舟

橋ハシ筏バタ綱釣ツナヅク清水シメヅ算ス關カ

伽ガ氷柱ヒヤシヅ○温泉オンセン塩焼シホヤク浮

水ミヅ釣瓶ツヅク下樋ゲノヒ浮桶ウヅク蛸壺タコウ

海士ウミシ狸ヌル和布ワフの類ノルイ○亀

水鷄ミヅトリ守宮ウケノミ水鳥ミヅトリ千鳥チトリ都

鳥トリ鳩トビ藻モ住虫ジムシ魚鱗イサハ

の類ノルイ○橋姫ハシメ夏神樂ナツカミガク放生ハシラシメ

會カイ○御稜ミカサ○月ツキの水ミヅ

月ツキの出イデ○滯漂シウヒョウ

水ミヅ屑クセ蛇籠ヘビカゴ○藻モ蓮レン苔カモシ

濱荻ハマアシ杜若ツクシ菖蒲アヤメ○真マ

薦タタミ萍ヒラ菱ヒシ流水リウスイ○氷魚ヒヤイサ

田井「柴漬」亀井〇里の
蟹「水主」せうり「湾」やみ「篠」やみ「住吉神」
三井寺「清見寺」志賀の
松「大津」明石「粟津」須戸
松島「三つめ」小島「難波」
津「浦」ある関「六瀬」濱木
綿「非水辺詞」難波寺「志賀」
住吉「大井」粟つが原「天の
うね橋」泪川「みろせ川」夢
の浮橋「高津の宮」白川の
関「月の水」軒の玉水「布曝
ま」室の八「詞」いそやの海「田の

箕「苗代」〇「菅屋」横川「小
田の梯」霞のうら「硯水」さ
の渡〇「管」きり「蓮肉」蓮の上
契〇「岩舟」くもり具「淀
思ひの淵」松浦姫〇龍「干
魚」干貝「乾海」嵐「天水」鶴
の橋「紅葉の橋」

季よきなさるる詞附雑の巻目

葉守の神「梅の宮」雪山か
とふり「和泉の國」放生川
櫻川「榊」浦「柳の水」橘の
都「藤原の都」柞の木林「富

士の雪「菜つミ川」鹿の角「藻

住虫「鳩」ミの虫「かつむ

り「鶴の巢」鳥「梟」都鳥

「玉む」か「さき」雲雀毛の

駒「黒牡丹」干魚の類「榎

柏「椋」干種「菜」白魚「柴」末

摘花「空蟬の君」洛葉の宮

「薄殿」茶の花「香」菜飯「菜

汁「いけ栗」梅干「煮梅」干

わらひ「いり豆」鶺鴒の巢「經

帽子」野遊ひ「頭の雪」眉

の霜「梅壺」柳「橋」笠「笠」網

代屏風「細代車」黄泉「詞

の花「花娘」花聲「花の帽

子」花田「花うつと」さゆり

「浪の花」さのま「さむ

ら」花子の狂言「花の帯」さ

かいらさ「造り花」さかつ不

「花丁子」花山の文をよと入とくらえ

春の月「月花」朧月夜「朧

影朧とみづり八月よあけらげを

夏朧の夜とよむおれどの月「鉾の月」夏の夜の霜

秋の月あきももさき「あき」あきの雪

月のあきをさきとよむ「月の霜」あき

但お八秋も降ものきまば句
よよりてふるものときまきり
夜分よ

何さる秋の月 三ヶ月出「くわの

月「朝の月「昼の月「暮の月

「夕月」繪よかたる月
上旬の月
出るこゝ

てハ花分よあらむ。下旬の月
入るじてハ花分よあらむ
月の

字を合する時秋月は用る分

「玉兔」「玉蟾」かたら男「常娥

「嫦娥」「盃の光」「盃の影」待

宵の影「いさよひ」「有明」さ

ゆら男

「冬月」「寒月」「さめる月」「月の

氷
呀る月之水辺
小ハあらむ

「雑の月」「心の月」「胸の月

「夏の正花」「余花」
結露
「若葉の

花
まじりの
「花小杜鵑」
さよはけく
さあは

るり

「秋の正花」「花火」
夜分
「花相

撲
植物よ
「花燈籠」
夜分
さあは

○灯籠植
物よあらむ

「冬の正花」「帰花」
年あらむ

「餅花」
植物食料
小ニ勺去
「雑の正花

作り花
植物よ
「繪の花」
上花

結バ
後りよ
「花真壺」
あさ壺

こほの花
「花鞆」
花形
鼓るよ
り念植

物よあ **「花塗」**花かひらぎ 鮫

まもやうあるは **「茶の花香」** 食

く **「花子の狂言」** 人通 **「燈火」**

花 花 **「花鱈」** 食 **「花毛氈」**

「花の種」 **「花筵」** はたけのつよ

うも毛種或ハ茶と **「詞の花」** 植物

二句 **「声の花」** **「花やさ」** 佳の茶

「花やう」 茶のまじり **「花紅葉」** **「雪月花」**

雪月茶ハ月茶のまじり **「雑」**

系物 **「花實」** 上

「非季の詞」 茶中の非 **「雪山」**

水。扱う浦。楓岡。楓川 **「楓人」** 沖

「諏訪祭」 此祭年は七十余あり

むらさき。藤の葉 **「藻小をむ虫」**

秋より **「黒牡丹」** 劉訓

「切字」 **「林」** 万葉

「治定の哉」 人の詞を

「治定のや」 上

「色去の」

百廿五

〇らん。あり。〇らん。〇城。現在

の。〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

〇らん。〇らん。〇らん。〇らん

日ニ連る日日「鳩鳥」小名のうここと

句「女の字」女郎「鶴の林」

「馬駒」後「研」山「霰」あ

「網代」二月代「ゆゑ」とく

「以方とく」終末とく「木

綿木「蝉」胡

面と始ふもの「雷」ひる「花の散

「初」庭「燈」照

「戸」谷の「とんる」め但せ女のまぶ

「魂」玉の「新」焼の「垣」垣「と

く」深「寐」める「昔」いよ「海

「帯」帯

「宿」宿「清」清「朝庭

「網」網「赤」明「扇」

「夕暮」夕ま「都」九「清水

「壽福木の壽の字」いのち

「志」志「氷室」うすらひ

○百韻之式

表八句七句日月裏十四句九句

二表十四句十三句二表十四

三表十四句二の表三表

名残表十四句三

裏八句七句目花

七十二候の式表八句裏十四句

表十四句裏八句。百韻の三の一抄
按ると七十三句と云ふべし

○四十四候の式 表八句裏十四句
名抄表十四句裏

八句。百韻の初抄と名残
の二抄よて四十四なり

○五十韻 表八句裏十四句表十四
句裏十四句。百韻の二

の裏と云ふを五十韻と云ふ七十二
候五十員四十四と云ふ花月の定
する額
又同ト

○歌仙之式

表六句 五句め月
の定せ 裏十二句 七句目
月十二

句目 表十二句 十句め
月あり 裏六句 五句
め花

○源氏の式

表六句 五句め
月定せ 裏十二句 七句
め

月十句め 表十二句 十一句
め 裏十

二句 月花
目あり 表十二句 あま
目あり 裏

六句 五句目月の定せ。源氏ハ
この抄を源氏加へて

表裏して二十
四句と云ふ

○長歌之式

表八句 七句
め月 裏十六句 九句目
月十三句

め 表十六句 十五句
目月 裏八句 七句
目花

○短歌之式

表四句 裏八句 初句目月
七句め花 二表

八句 七句
め月 二裏四句 三句
目花

○長歌の式 四抄よて四十八句の短歌行
三十四句の長花坊支考と作ると云ふ

○箴 表六句 五句
め月 裏六句 五
句

目花又表六句、裏六句、よて
二十八句なりといふ

○首尾 表六句五句 裏六句五句

句五句 〇三物護句 〇三亦三

句數同季四季 春秋四季

三句より又句まで二句 夏冬一旬

二句までハまで二句 戀二句

五句より又句まで五句 神祇一旬

句未だ終より出句 無常一旬

句未だ終より出句 親教四三

句未だ終より出句 迷懷三句

句未だ終より出句 山類一旬

句未だ終より出句 水邊一旬

句未だ終より出句 人倫二句

句未だ終より出句 居所二句

句未だ終より出句 生類一旬

句未だ終より出句 植物一旬

句未だ終より出句 衣類一旬

句未だ終より出句 名所二句

句未だ終より出句 國名二句

句未だ終より出句 夜分二句

句未だ終より出句 降物二句

句未だ終より出句 聳物二句

句未だ終より出句 天象一旬

四季の持扇終

持扇跋

黃鸝嘆老杜鷓鴣壯黃梅
天間居愛無事親四友蕭
然消日矣俄一書賈捧帙
而進啓視之乃俗稱俳諧
季寄者而卷末併載白雄
之苗代水一書蓋源出於
年浪草而汲玄同之歲時
記下流以別為一支川者
也然其源流悉非清水而
濁水交有流傳宜不捨捨
謬損味惜哉這書隨流沿
習而不擇清濁當為備習

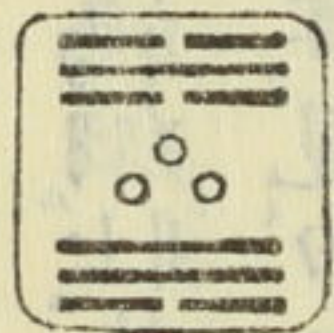
學之便覽乎既刻成無如
 之何要知其事々物々之
 正誤者有積讀書之功焉
 出格亦可有其期余爲書
 賈聊訂正文字誤脫而一
 時煩机上之四友加勞予
 方先生而已

昔

慶應歲次丙寅天中節日

江都萩原乙彦識於葛

本



誹諧苗代水

冠体留五七の言種ハ此道ハ
 格ぶ初心の言さふ長もの
 一々先四季此類を標り句を
 作ふんと名ふは五文字あり形を
 らる。梅のむ。新の。秋の
 新ありけりなむの類ハ冠小を
 也まの留おをづりやうの体ハ七
 文字を自定して考ある時を必す
 歌をさうけりて文字を亦考へて
 一句の意をなす一序歌曲をさ
 むハ一二字三つのものあり此ハ
 〇化。月まの。音。叢の類ハ
 〇花見の。月お砕ら。叢ハ
 〇此等さうの類ハ五文字を定む
 体ハ七字と考合はる。後ハ
 句を定めて句作とさる。此ハ
 体留ある言より。五文字の句を
 らむ。さあけりて。さう。能
 け。は。さ。お。の。と。な。言。其。言
 くと。意。形。く。他。さ。ふ。あ。わ。ら
 神。意。妙。く。の。名。白。屢。な。り。の。後
 此。言。み。け。り。さ。う。さ。う。ま。り。け

苗代水

冠五言

道志志也	いその神	そのつら	四方山を	横もふら	そのつら	世をいごふ	身成思ふ	月をめぐ	花やいな	あむるそ	夕栄や	かあふば	事さそ	淡老く	山久身	咲	星をさ	見之さ	山や花	山島は	曉	胡わし
まかたの	淋さふ	日たれ	田たの	風流若	雲のた	草むら	あふま	春や	舟曳は	花はさ	日もさ	あふり	日流田	若く	笑ふ	手はは	ささ	松ま	何玉	あふ	むさ	は

同

有りの	手あ	は	い	木	病	月	色	時	あ	廣	谷	砂	乃	任	更	浦	荒	い	ん	静		
新	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ

昔代

志帆片帆 六合帆の 形とん 知人小 舟外さく 海山は 朝ちり記 思ふ事 里の山 あふふ 新庵の 誓あふ あふふ 川はや 川淀や 月の海の 明る板舟 古の所 一ひめ 小松海 らうく 健いさ 別や	志帆片帆 六合帆の 形とん 知人小 舟外さく 海山は 朝ちり記 思ふ事 里の山 あふふ 新庵の 誓あふ あふふ 川はや 川淀や 月の海の 明る板舟 古の所 一ひめ 小松海 らうく 健いさ 別や
--	--

宿りて 魔のま 小禁 傷むり 身まくら 妹とと 虎とと 凡海の 古里は 物ふ叶 美代も 君代の 期そと 文を 坊か 清恵や	佐位の 文す 旅信 身修 傾城 鬼も 善化僧 味あ 子代 子代 名に 度あ 神屋 松手
--	--

休七言 所首の 送織り つま 糸の光 筋ふ 新ふ	同 あふ 霧う 人の 時と ごと 魚を
--	---------------------------------------

梅代り

一あしはくも 鼻の先を
初よりうらそ 管小懐く
門をたたく 終小懐く
なすて極し 片神く
舟のあひら 沖の時を
押さえるる 萩まを海
小川流る 堀の流る
たふらふを 夜ふを
皆集るや を待てる
あつ海く 唯く
神のつを けく
泥中枝を 神のつ
今よりちを 下戸の
輝けく 唯今
まを口を 湯を
縁神のせ 茶を
暖まを 柳く
あまを 斜小
先毛のつ 夕日
中より 友撰
休の二散る 中
二階小 中
月の初不見 空
船海く 舞

影のあはれ 舞の上り
物あを 青ハ
むらうは 萩
今小付く 下
力及る 叫
流のあはれ 川
流海の上は 柳
定ぬれは 手
雨降る 舟
人あはれ 船
目を覚は 寂
ふり文や 宿
晴れうら 萩
侍所は 萩
足折可め 萩
磨の服の 萩
物小名の 萩
萩を 萩
萩より 萩
萩より 萩
萩より 萩
萩より 萩
萩より 萩
萩より 萩

苗代

夢小起り	舟と陸との
生らぬあがり	草と草との
舟舟通ふ	雨小對して
清き神	鏡くあはれ
毎小乱る	鳴り上た
かくいれ中の	人小遊り
ありのうしひ	つきてて戻
暮とあはれ	圓う流より
粧らうや	終小を初
あはれい	時あはれ
寺麓を歩	かまへん
案とちと	縁の海や
松屋漆	破裂し初
木の木の	人か回り
形か	あはれ
噴ま	心さすけ
文子雨	大木の影
旭の竹	を福玉
物小かま	満洲の船
小川のあり	谷川の
滝の	岸の朝
鏡の	鏡の
燈火志	案の
風を	あうき風の

飢のあ	葎の
月を	月頃同
情小	雲の
舞の	山
い	浪の
岩小	崎の
漣	湖の
神	神

音五言 同

花	梅
香	正
夕	月
秋	念
夕	思
清	園
あ	清
あ	依
は	あ

自ひとら	をゆり
朝ちりし	砂のうへ
舟舟舟	まをちきれ
物はきき	波はきき
風のきき	かきき
すしこふ	物あはきき
白かけ	けりありぬ
跡せ先	けりあり
青の月	又月影
旭の月	けりあり
最はあ	滝のきき
ありのき	湖のきき
滝のきき	義のきき
松のきき	雲一本
あきのき	里のきき
少徳弟	くまき
けりけり	教はき
水はき	望のき
年はき	石のき
遠はき	おのき
きはき	か百性
あはき	一はき
神はき	神のき
物はき	月出のき

俳諧聯句

世ふとふふのふふ風推さると
 一して驚ふふふふを情う
 結しつはあふははははは
 松とてふふとふ味呷のれむう
 空はは情慢那知ふふふふふ
 一してふふ自ふとふは安ふ
 吾を慮あふふ人と嘆しつはふ
 風推のふふふふとふふふの
 祖のぬの教ふしつをふふふふ
 四時の歌を採ふふふふふ曲
 の三つをふふふふふふふふ
 度ふふふふ魂をふふふふの
 をまふふふ一將録ふふふの
 余情を採ふふふふ一はふふ
 るふふふふふの語をふふ考ふ
 一ふふのふふふふふふふ
 百化の風推をふふふ一ふふふ
 七ふふの情をふふふふふふ
 有ふふの情をふふふふふふ
 分ふふてふふふふふふふ
 百ふふふふふふ考ふて四ふ

〇表六句
梅魂 五体
離子
秋海

〇表六句

梅魂 五体
離子
秋海

〇同

梅魂 五体
離子
秋海

梅魂 五体
離子
秋海

有明

風魂

骨法

〇同

霜月魂 五倫
梅魂 五体
離子
秋海

霜月魂

五倫

業

〇轉方

今更らふの情は月夜月夜

秋たき味もあやう高河原 廿夜

○ 六月。向何考。片断

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同

体七言

同

是ハ雅ウ云々

とれ不魂と入て一 只身兼あ

向の月定を思 在る月井の目と

湖向の筑妻前 鍋のひま

まふふふ 宿のとり付

まふふふ 宿のとり付

つゝき軍の秋 都 懐

来うけ下地 心んら

猶もまをわく 毛をまを

永き協きり 口そくぐ

衣をまをわく 衣をまを

ひささのく 衣をまを

あふと合ふ 衣のつと

あふと合ふ 衣のつと

あふと

七

酒玉武士は 舞ふれぬを
小帯のひかり 招来扇を
入る人ふし しの狭き
嘆けり 格とふを
ふりかき 小太ふ
うしろのふ 山の桐中
軍の中り 志きふふ
ちりく人を 生れけし
言低うを 坊主ふあれど
涙あふれを 雛ふあり
つりく一 人のそいつく
星ふて かせあけ海
髪をひを 雲のふ
恨めを 何年か
恨めを 未だ
涙をひを いく
福をひを 雲
存をひを 重
そを け
おのふ 朝ふ
何やふ 格
格ふふ 養子
仮の内 養子
ふと書 正月

あふりの心 甲のちりく
何とせぬふ 籠すく
目の内あり 只
哀とあり 依
おのふ 柳
涙のふ 堂
まのふ け
文珠の 世
一とあり 何
業や 小
ゆゑ下 一
扇後 呼
浮世の 雨
力あり 牙
骨の ぬ
静あり 雨
徳あり 丁
四十八 廿
小判あり 孫
思あり 何
志あり 別
竹の 別
そあり 孫

荷持ひたりふ
船出果は
舟と不整を
管て母を
あけあつた

五言
同
億々々々々
めひひひひ
斤斤斤斤
竿竹不
物ととは
降一
尻野
店さ
俺なれ
渡お
船と
屋切
乃
あ
漸
う

あ
甚
馬
曉
降
そ
道
面

冠五言
同

い
歡
其
縁
通
股
大
加
入
下

坊（小虫のまゝ） 頃
○對附

素良（七重七雲伽藍八重栴）

○牙三向法○杉形○大山

切（花） 柳（花） 柳（花） 柳（花）

○十五方附方

理（甲斐文の相） 理（甲斐文の相）

遠（須戸の明） 遠（須戸の明）

離（縁） 離（縁）

其人（雛） 其人（雛）

其場（滝） 其場（滝）

時分（時） 時分（時）

時侯（息） 時侯（息）

景色（又） 景色（又）

坊（小虫のまゝ）

向附（中） 向附（中）

迎（戸） 迎（戸）

心（妹） 心（妹）

響（夏） 響（夏）

寂（内） 寂（内）

境（石） 境（石）

包（百） 包（百）

是（先） 是（先）

右十七ヶ條畢

白雄房昨鳥著

原書有誤焉者今正此

十時蕉華庵乙彦

俳諧初學書目

俳諧寂榮 白雄坊撰 三冊

發句五百題 同撰 二冊

故人五百題 松露庵撰 二冊

新五百題 田喜庵撰 二冊

新々五百題 二冊

近十家五百題 過日庵撰 二冊

近百家五百題 二冊

文久五百題 二冊

元治五百題 二冊

安政付合集 半青居新雨著 二冊

蒼虬翁付合集 同撰 一冊

日本橋道二丁目

須原屋茂兵衛

同 山城屋佐兵衛

須原屋新兵衛

銀座三丁目 山城屋政吉

芝神明前

和泉屋吉兵衛

同 岡田屋嘉七

横山町三丁目

和泉屋金右門

淺草茶町三丁目 須原屋伊八

池ノ端仲町

岡村屋庄助

上野御成道

英屋文藏梓

東

都

發

行

書

林

